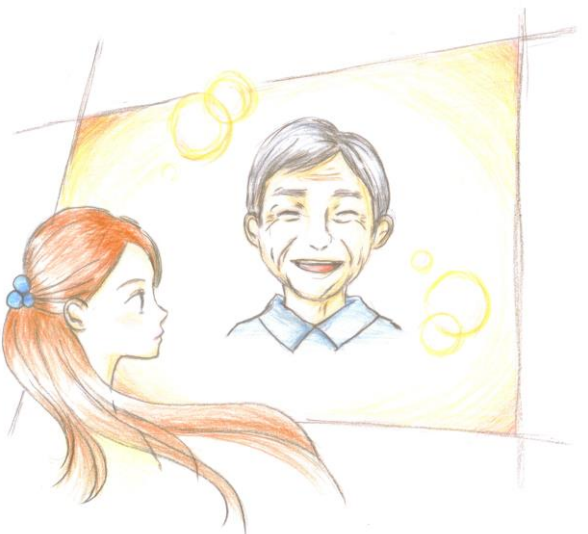


## おじいちゃんの だるま

C 14 家族愛



【主題名】 だるまが教えてくれた家族の絆  
【ねらい】 祖父が大事にしていただるまの存在を知ったことから、祖父への敬愛の念を深める沙織の内面を考えることを通して、家族が温かな絆で結ばれていることに気づき、家族とともにより幸せな家庭生活を送ろうとする心情を育てる。

「今年はお姉ちゃんの番だからね。」

冬休みに入って三日たち、今年最後の部活も終わって部屋でくつろいでいるとリビングから弟の陽介の大きな声が聞こえた。

「何の話？」

リビングに行くと言介は食卓の上にある神棚を指さした。

「年末の神棚の掃除だよ。去年は俺がやっただろ？」

我が家には、大きくて立派な神棚がある。五年前家をリフォームした時、最新の対面式のキッチンに続くリビングに神棚は不釣り合いのような気がしたが、祖父が作った大事な神棚だからと、母の意見で家族が集まるリビングに設置することになったのだ。それから暮れの大掃除の神棚担当を私たち姉弟が引き受けることになった。

中学生の私がまだ幼稚園に通っていた頃、役場勤めの合間をぬって熱心に日曜大工をする祖父の姿はよく覚えている。一カ月ほどで、ただの板が立派な神棚に仕上がったのを見て、子ども心にも「おじいちゃん」の偉大さを感じたものだ。その祖父も、今年の春に亡くなった。

「はい はい。」

やっとのんびりできると思ったのに・・・それにしても何でこんなに大きな神棚をおじいちゃんは作ったんだろう。細かい細工がいっぱいあって、奥の方は手が届かな

いし・・・掃除が大変なんだよなあ。早く終わらせてゲームの続きやろうっと。

「よいしょっと」

脚立が上がって、次々と神棚の手前にある三方やお札、たくさんのお供え物を下ろして、薄暗い奥にクリーナーを持つ手を伸ばしながら手早く拭いていった。

「ちよつと、もう少し丁寧にやらないと奥の・・・落として・・・」

母の声の方向に体を向けようとバランスを崩した時、クリーナーの先が何かに当たった。

「あっ!」

二つ三つ四つ・・・ゴロゴロゴロつと赤くて丸いものが神棚から転げ落ちた。

「ほらごらんさい。」

「なにこれ? だるま?」

埃をかぶっただるまたちがリビングの床でユラユラしている。背伸びしてそつと覗いてみると、まだたくさんのだるまがあるようだ。私は脚立から飛び降りた。

「もう、沙織ったら。おじいちゃんのだるまを。」

愛おしそうに母が両手でだるまを抱えた。

「おじいちゃんのだるまって?」

一つ一つだるまを拾い上げテーブルに置きながら母が話し始めた。

「うちはおじいちゃんも、またそのおじいちゃんも先祖代々この町で暮らしているのは沙織も知っているわよね。うちは今も少し畑があるけど、もともとは大きな農家でおじいちゃんのお父さん代まで農閑期にはだるまを作っていたのよ。おじいちゃん畑をやりながら役場勤めをしていたから、だるま作りはしていなかったけど、木型はまだ物置に残してあるわ。」

私の町でだるまが作られていることは小学校で習ったことはあったが、うちのご先祖様がだるま作りをしていたことははじめて知った。

「おじいちゃんね、家で作っていただるまをとてとても大事にしていたみたい。春におじいちゃんが亡くなって部屋を片付けていたら、押し入れの奥にあったつづらからたくさんだるまが出てきたのよ。家の家紋がついた大きなふろしきに包まれていて。そのままにはしておけないでしょ。だから、神棚におまつりしておいたのよ。」

いつの間にか陽介もやってきて母の話に耳を傾けていた。

「そうか、だから昨年、神棚を掃除したときにはだるまはなかったんだ。まだ奥にあるだるまは俺が下に下ろすよ。」

一つ、二つ、三つ・・・三人でテーブルの上に並んだだるまを数えながら、腰かがめて一つ一だるまの顔をじーつと眺めていた。色も褪せてしまい、古い歴史を感じさせるだるまもあった。すごい！全部で十個・・・

「だるまさん　だるまさんにらめっこしましょ　笑うと負けよ　あつぷつぷつ。」  
陽介が歌い出し、顔を見合わせて大笑いした。

「みんなそれぞれ顔が違うよねえ。」

「木型で作るから形は一緒だけど、お顔は手書きなので個性があるだるまができるって、おじいちゃんから聞いたことがあるわ。」

「これさあ、おじいちゃんの顔に似てない？」

本来、役目を果たしただるまは、供養しなければならぬらしいが、代々引き継がれ、その時代　時代を目に焼き付けてきただるまが、ここにしっかり残されていた。初めて対面した十個のだるまたちは、この家で生活する人たちと共に生きてきた命あるもののように見える。家族の喜びや悲しみ様々な思いを記憶しているだるまを、ご先祖様たちはかけがえのないものとして手放せなかったのだろう。

そして、ずっと長い歴史の中、家族を見守ってきてくれたこのだるまたちを、祖父もまた、時々押し入れから出して部屋のテーブルの上に並べていたかもしれない。どんなことを思いながら一つ一つのだるまを見つめていたのだろう。

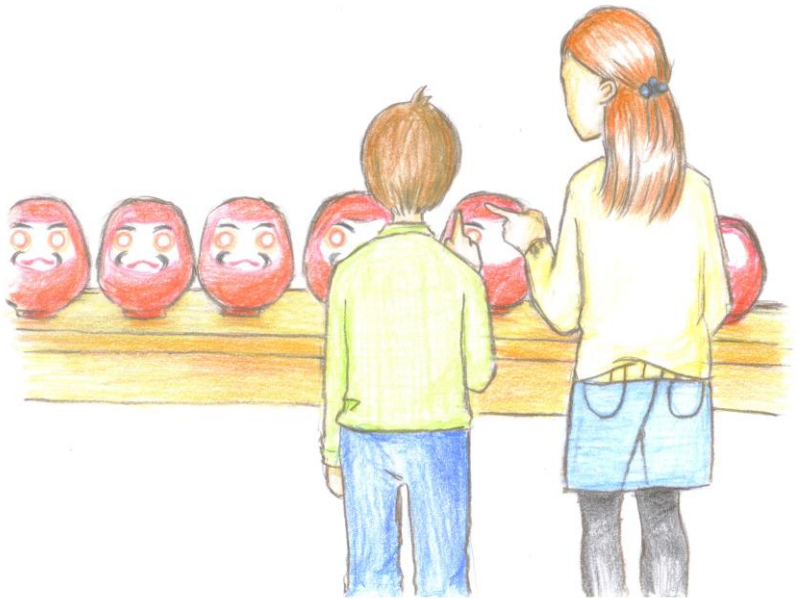
「ただいま。」

玄関で父の声がした。明日が仕事納めという父が今日は少し早めに帰宅してきた。

「へー、行儀よくだるまさんが並んでいるなあ。じゃあ、このお土産も仲間に入れてもらおうか。」

父は持ち帰った二鉢のシクラメンをだるまの隣に置いた。毎年父はシクラメン街道のシクラメンをお正月用にと、この時期購入しているのだ。

「何だかみんなに見つめられて、だるまさん恥ずかしそうだね。」



「きれいなシクラメンと一緒に嬉しいんじゃない？」

「ねえ、今、一番右のだるまさん笑ったよ。」

「えー？笑うと負けだぞー。」

「さあさあ、もう夕飯の時間になるから、沙織、だるまを神棚に戻してちょうだい。」

賑やかな家族の会話の中に私はふと寂しさを感じた。

「今日はさあ、おじいちゃんの部屋にだるまを置こうよ。」

私の提案で、だるまたちは祖父の部屋へと運ばれた。おじいちゃん、色白で鼻筋の通った凛々しいだるまさんに会わせてくれてありがとう。家にこんな宝物があったの知らなくてごめんね。

おじいちゃんのかっこいい姿も思い出したよ。

今日はゆっくりだるまさんたちとお話してね。

「お母さん！家にだるまの木型あるんでしょ？私にもだるま作れるかなあ。」  
十一個目の家のだるまは私が作るね。おじいちゃん。

### 【発問例】

- ① 沙織はテーブルの上のだるまの顔をじーっと眺めながらどんなことを考えていたでしょうか。
- ② 「今日はさあ、おじいちゃんの部屋にだるまを置こうよ。」と言った沙織の気持ちを考えよう。
- ③ 今日の学習や自分の家族のことを思い返して、どんなことを考えましたか。

作 瑞穂町教育委員会